小学校教育　二〇二二年十二月　第五十九号　北海道小学校長会

小学校教育

会報教育北海道別冊

59　北海道小学校長会　2022.12

表紙のことば

「川のまち旭川から」

旭川市立東光小学校　石ヶ森　孝　順

旭川市内を流れる川の数は約170、架かる橋は700を超え、表紙の写真にありますように、川のまちと呼ばれる旭川市は、橋のまちでもあります。橋が架かることによって地域がつながり、社会・経済・教育・産業の発展とともに、新しい文化・未来が創造されます。

旭川大会では、「川のまち旭川から 子どもたちの笑顔と希望の架け橋となって 未来をともに創りだそう！」をキャッチフレーズといたしました。

そこには、道小会員の皆様が一体となり取り組まれた貴重な研究の成果が、「人と人をつなぐ架け橋、次代を担う子どもたちの笑顔と希望への架け橋」となり、そして、子どもたちが力強く「未来を創り出す」担い手となってほしいという願いを込めて、開催に至りました。

全道の校長先生、関係機関の皆様の深いご理解とご支援のおかげで、未来社会に挑戦する子どもを育てる学校経営の新たなステージに向け、大会の成果を発信することができました。

先の見えない社会の状況は続いておりますが、今後も、全道各地の校長先生が、光り輝いて流れる川のごとく、柔軟に明るい未来を見据え、大会の成果を各学校における実践につなげていただければ幸いです。

自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～ふるさとに誇りと愛着をもち
ともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の推進～

第65回北海道小学校長会教育研究
旭川大会
65th ASAHIKAWA

川のまち旭川から
子どもたちの笑顔と希望の架け橋となって
未来をともに創り出そう！

第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会

もくじ

大会特集

小学校教育

59

令和４年12月

大会会長挨拶 …… 2
大会実行委員長挨拶 …… 3
祝　　辞 …… 4
道教委講話 …… 8
当面の諸課題 …… 12
記録写真 …… 20
大会主題・研究課題　趣旨説明 …… 22
研究大会開催要項 …… 23
分科会運営者一覧 …… 24
第１分科会 …… 25
第２分科会 …… 28
第３分科会 …… 31
第４分科会 …… 34
第５分科会 …… 37
第６分科会 …… 40
第７分科会 …… 43
第９分科会 …… 46
第11分科会 …… 49
第12分科会 …… 52
第13分科会 …… 55
大会参加印象記 …… 58
研究のまとめ …… 60
次期開催地挨拶 …… 62
編集後記

第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会

大会会長挨拶

北海道小学校長会長
紺野高裕

全道各地の皆様、おはようございます。

「川のまち旭川から子どもたちの笑顔と希望の架け橋となって 未来をともに創り出そう！」をキャッチフレーズに、ここ旭川市において、全道各地550名の方の参加申込を得て、第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会が、新たな試みであるハイブリッド形式で初めて開催されますことは、非常に意義深いことであります。

この場には110名ほどご参集いただいております。旭川市小学校長会の皆様には、長期に渡りこれまで経験したことのなかった業務を含め準備に当たっていただきました。開催方法の変更にも結束してご対応くださり、その甲斐あって、今回は３年ぶりに話合いによる「分科会」を開催することができます。ご尽力いただいた方々のご労苦に、改めて感謝申し上げます。

本教育研究大会の開催に当たりまして、公務ご多用にもかかわらず、全国連合小学校長会長　大字　弘一郎　様、同事務局長　小泉　与吉　様のご臨席を賜りましたことに、心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。本日は、大字会長より当面の諸課題についてのご講話をいただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

また、例年ですと北海道教育委員会からのご講話もございました。昨日行われた第３回理事研修会にて、中澤美明指導担当局長　様よりご講話をしていただきました。その記録は研究大会の集録に収めさせていただくことになっております。

本教育研究大会は、私たち道小の根幹を支える活動です。全道校長の半数以上が参加する研修の場において、教育の現状を語り合い、北海道教育の質の向上に向けて、我々校長が研鑽を積んでいくことが大切です。

道小では、これまでも分科会の充実を図るために、グループ討議の在り方やアナライズカードの活用、討議内容の視覚化など、様々な工夫を重ねてきました。今回はオンラインを活用したやり取りということで、難しい面もありつつ方法を工夫しております。参加される会員各位の積極的なコミュニケーション等のご協力に負うところが大きいと存じます。準備に当たられた皆様のご努力に応えるためにも分科会の充実に向けて、ご協力いただきますようお願いいたします。

今、コロナ禍における様々な対応に奔走しながらも、教育改革の動きはますます加速しています。旭川大会が新たな起点となり、北海道教育の充実・発展に資することを信じております。本大会において、各分科会の課題を究明していくことを通して、研究内容が全道各学校に還流され、学校経営に反映されていくことを強く願っています。

結びになりますが、本大会の開催に当たり、きめ細かく周到な準備を積み上げてこられた、石前実行委員長を中心とした旭川市小学校長会の皆様と、お力添えを賜りました北海道教育庁上川教育局、旭川市及び旭川市教育委員会をはじめ、多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

それでは、学校改善と本道教育の質の向上のために、ここ旭川の地と全道各地を結んで、大いに研修に努めることを誓い合い、開会の挨拶といたします。

本日は長い時間となりますが、どうぞよろしくお願い致します。

第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会

大会実行委員長挨拶

旭川大会実行委員長
石　前　聖　香

全道各地区校長会の皆様、おはようございます。旭川大会実行委員会を代表してひと言ご挨拶申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の拡大から２年余りが経過しました。「新しい生活様式」が定着し、徐々にポストコロナの社会を見据えた動きも進展しつつあるところですが、一方、感染症の終息については未だ先の見えない状況が続いています。

このような中、第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会は、全国連合小学校長会の研究主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を受け、「ふるさとに誇りと愛着をもち ともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」を副主題に設定し、学校経営の責任者である校長の果たす役割と指導性の究明に向け、３年ぶりの参集型開催の実現を目指してまいりました。しかしながら、感染状況と本道の広域性を鑑み、会員の皆様の健康と安全を第一に考え、開催方法を変更することとなりました。参集規模を大幅に縮小し、全道各地区校長会の皆様方を旭川市に盛大にお迎えすることが叶わず、残念な思いはありますものの、令和３年度石狩・千歳大会の成果を受け継ぎ、研究・交流の一層の充実・深化を図ることができるよう、会同とZoom会議システムによるハイブリッド開催の成功に向け、大会実行委員会の総力をあげて準備を進めてまいりました。

本研究大会は、「校長の職能向上」と「北海道教育の振興・発展」を目指す北海道小学校長会の根幹を支える活動です。改めて、本大会を開催する機会を賜りましたことに、重責を感じますとともに、深く感謝を申し上げる次第です。

旭川市内を流れる川の数は約170、架かる橋は700を超え、川のまちと呼ばれる旭川市は、橋のまちでもあります。橋が架かることによって地域がつながり、社会・経済・教育・産業の発展とともに、新しい文化・未来が創造されます。旭川大会では、道小会員の皆様が一体となって取り組む貴重な研究の成果が、「人と人をつなぐ架け橋、次代を担う子どもたちの笑顔と希望への架け橋」となり、そして、子どもたちが力強く「未来を創り出す」担い手となってほしいという願いを込めた大会にしたいと考えています。

本日は、全国連合小学校長会長 大字　弘一郎　様からの当面の諸課題に係る最新情報のご提供と、分科会での全道各地区からの貴重なご提言をもとに、会員同士が画面上ではあっても互いに顔を合わせ、声を聴き合うことを通じて、研究と交流を深め、確かな思いをつなぐことができるよう、精一杯のおもてなしの心で運営等に力を尽くしてまいります。何かと行き届かぬ点もあろうかと存じますが、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

結びになりますが、大会の開催に当たり、ご指導とご助言を賜りました北海道教育庁をはじめ、旭川市及び旭川市教育委員会、並びに全国連合小学校長会、北海道小学校長会、関係諸団体の皆様に心から感謝申し上げますとともに、コロナ禍が終息した際には、ぜひ皆様に旭川市にお越しいただける日が来ることを願い、大会実行委員会を代表しての挨拶と致します。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

祝　　電

文部科学大臣　**永　岡　桂　子**

第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会が開催されますことを心からお喜び申し上げます。

御参加の皆様におかれては、子供たちの学びの保障と感染予防を両立させるため、日々の授業や学校行事などにおける感染症対策を徹底しながら教育活動を実施いただいており、その御尽力に対し、心から感謝申し上げます。

子供たちを取り巻く環境が、日々、大きく変化する中、初等中等教育においては、一人一人の子供たちの可能性を最大限引き出し、子供たちが新しい時代を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を育んでいくことが重要です。

こうした中、本大会が、「自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る　日本人の育成を目指す小学校教育の推進　－ふるさとに誇りと愛着をもち　ともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の推進－」を主題に開催され、その優れた実践が共有・普及されることは大変意義深いものであります。

皆様の熱心な取組によって今後の小学校教育のより一層の充実・発展が図られることを心から期待しております。

祝　　辞

北海道知事　鈴木　直道

第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会が開催されますことを心からお喜び申し上げます。

会員の皆様には、日頃から、本道における小学校教育の充実と発展に多大なるご尽力をいただいていることに、深く敬意を表します。

人口減少・少子高齢化の進行やグローバル化の進展、さらには脱炭素化やデジタル化といった社会変革の動きなど、様々な社会環境の変化に対応しながら北海道の未来を切り拓いていくためには、ふるさとへの誇りと愛着を持ち、多様な分野で活躍し、地域づくりに主体的に取り組む人づくりがますます重要になります。

このたび、「自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る　日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を主題として本大会が開催され、学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりや、知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントの推進など、道内各地の特色ある取組の情報を共有し、様々な視点から議論を深められることは、今後の小学校教育において大変有意義であると考えます。

子どもたちにとって、小学校の６年間は、生涯にわたり学習する基盤を培うための知識と技能を習得する重要な時期であり、道といたしましては、将来を担う子どもたちが夢と希望にあふれ、健やかに成長できるよう、学校教育の発展に取り組んでまいります。

会員の皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症の流行が長期にわたり、教育活動に様々な影響が生じる中、感染リスクを抑えるための対策や、不安を抱える児童へのきめ細かな支援などに取り組まれていることに対し、心から感謝申し上げますとともに、引き続き、子どもたちの健やかな成長に向け、ご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、北海道小学校長会のますますのご発展、並びに本日ご参加の皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げ、お祝いのメッセージと致します。

令和４年９月９日

祝　　辞

北海道教育委員会教育長　　倉　本　博　史

第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会の開催を心からお喜び申し上げます。

北海道小学校長会の皆様には、日頃から、本道教育の充実・発展に向けて御尽力いただいておりますことに御礼申し上げます。

さて、新型コロナウイルス感染症への対応など、先行き不透明で予測が困難な状況が続く中、学校教育においては、子どもたちが自分のよさや可能性を認識し、他者と協働しながら様々な困難を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められています。

そのため、各学校においては、「社会に開かれた教育課程」の理念に基づき、学校教育全体を通じて育成する資質・能力を明らかにし、家庭や地域と連携・協働しながら教育活動を推進するとともに、全ての子どもの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実することが重要です。

こうした教育活動を先導される校長の皆様には、子どもへの深い愛情のもと、子どもや地域の実態を十分考慮しながら、教育への高い識見に基づく教育理念を明確に示すことや、複雑化・多様化する学校の諸課題の解決に向け、力強く学校改善を進めるスクールリーダーとしての行動力を発揮することが大切です。

このような中、本研究大会が、「自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る　日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題に掲げ、ふるさとに誇りと愛着をもち、未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の在り方について研究を深められますことは、誠に意義深く、道教委といたしましても研究の成果に大きな期待を寄せているところです。

校長の皆様におかれましては、北海道の将来を担う子どもたちに、ふるさとを愛する心や未来を切り拓く資質・能力を確実に育むことができるよう、リーダーシップを存分に発揮していただくとともに、引き続き、本道教育の充実に御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、北海道小学校長会の一層の御発展と会員の皆様の御健勝と御活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉と致します。

令和４年９月

第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会

祝　　辞

旭　川　市　長
今　津　寛　介

第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会が開催されますことを心からお喜び申し上げますとともに、全道各地からお集まりの皆様に市民を代表して歓迎を申し上げます。

本日、御参加の皆様方には、日頃から、教育の最前線において、子どもたちの健やかな成長と教員が働きやすい環境づくりに御尽力されることはもとより、保護者や地域住民の皆様ともしっかりと手を携えながら、先頭に立って魅力ある学校づくりに御尽力をいただいているところであり、この場をお借りし、心から敬意を表する次第であります。

こうして、全道各地から多くの皆様が御参加のもと、より良い学校運営や学習指導、学校が直面する課題等に関して研究協議が行われる本大会が本市で開催されますことは誠に光栄なことであります。

また、この度の開催では、会同者とオンライン参加者を交えたハイブリッド形式として、新型コロナウイルス感染拡大防止にも十分配慮されておられるとのことであり、開催準備に当たられた実行委員の皆様並びに小学校長会の皆様方に深く感謝を申し上げます。

現在、本市におきましては、次代を担う子どもや若者が、安全・安心で快適な教育環境の中で生き生きと学び、確かな学力、豊かな心、健やかな体を育む質の高い教育の推進に取り組むとともに、学校・家庭・地域の連携によるコミュニティ・スクールを通じて、社会全体で子どもを育む環境づくりを進めております。

このような中、本大会では「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の研究主題のもと、11の分科会に分かれての意見交換など、専門性の高い充実した内容が予定されていると伺っており、今日の教育課題について多様な視点から理解を深め、今後の学校づくりに向けての知識や経験の共有を図る有意義な機会となりますことを期待しているところであります。

ちょうど本年は、本市をはじめ、道内６つの都市が市制施行100年という節目を迎えたところであり、幾多の困難を乗り越え、今日の発展を築き上げてきた先人たちに感謝し、新たな100年に向けた歩みをスタートしておりますが、道内自治体のこれから10年後、20年後の社会をつくっていくのは、紛れもなく、今の子どもたちであります。

私ども行政といたしましても、教育現場の皆様としっかりと連携しながら、次代を担う子どもたちが、ふるさとへの愛着と誇りをもち、それぞれの夢や目標の実現に向けて、生きる力を育み、未来へとはばたくことができるような環境をつくっていかなければならないと考えておりますので、皆様方には、引き続き、今日まで積み重ねてこられた知識と経験をもとに、それぞれの学校でリーダーシップを発揮くださいますようお願い申し上げます。

結びに、本大会のご成功と、北海道小学校長会の一層のご発展、そして皆様方の今後ますますのご健勝とご活躍を心から祈念申し上げ、お祝いのことばと致します。

（令和４年９月８日(木)　第３回理事研修会）

道　教　委　講　話

「令和の日本型学校教育」の構築に向けて
～　ＩＣＴの活用と危機管理について　～

北海道教育庁学校教育局　指導担当局長
中　澤　美　明

令和4年度　北海道小学校長会　第3回理事研修会

「令和の日本型学校教育」の構築に向けて
～ＩＣＴの活用と危機管理について～

日時：令和4年9月8日(木)13:20～

北海道教育庁学校教育局
中　澤　美　明

この度は、貴重な機会をいただき、ありがとうございます。本日は、「令和の日本型学校教育」の構築に向けて、重要なことの中から、ＩＣＴの活用と危機管理についてお話しします。

校長会長のインタビュー等

【紺野会長】
- 感染症対策と学びの保障　→　これまでの経験の蓄積で恐れず粛々と
- 授業改善を核とする教育の質の向上
- 一人一台端末の有効活用　→　学校間格差の解消
- 「未来を見据え、チーム北海道として進む道小」

【各地区の会長】
- 道小、道中、道教委、各市町村の対応や取組の共有　→危機の克服
- コロナ禍で見直した教育課程のよさをアフターコロナにつなげる
- 改めて教育の意義や価値について整理
- 「変化を恐れず」「風通し」「教師のやりがい、達成感」「人を活かす」

本題に入る前に、これまで、北海道通信等に掲載されていた紺野会長様や各地区の会長の皆様のインタビュー記事について、特に印象に残っているキーワードについてご紹介いたします。

【紺野会長】

感染症と学びの保障については、「これまでの経験の蓄積によりおそれずに粛々と取り組む」というお言葉から、感染症対策に関する学校の自信を感じました。「授業改善を核にした教育の質の向上」からは、コロナ禍、ポストコロナのいずれにおいても授業を大切にする姿勢がうかがえます。「一人一台端末の有効活用について学校間格差を解消する」からは、校長会として教育の機会均等、教育水準の維持向上に取り組まれていること、「未来を見据え」からは、社会の変化を敏感にキャッチし、国や道の動向、全国的な情報を得ながら、常に風上を意識して取組を進めていることを改めて実感いたしました。

【各地区の会長】

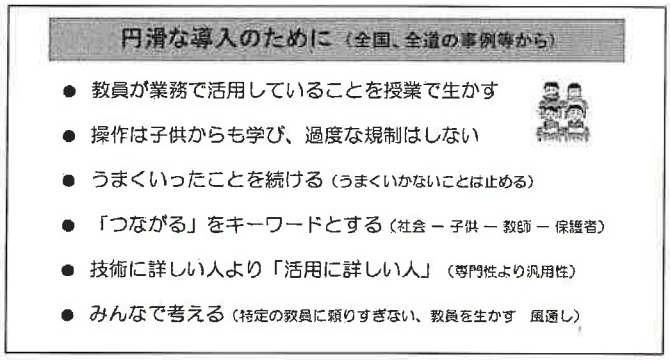
どの地区でも対応や取組の「共有」を重視され、結束して危機を克服しています。非常時やピンチの時こそ結束が大切であります。「コロナ禍で見直した教育課程のよさをアフターコロナにつなげる」という言葉もありましたが、今後、どの学校でも取り組むべき課題です。ある地区では、この課題を校長会の研究テーマとして取り組んでいると伺っています。「改めてそれぞれの教育活動の意義や価値について整理」とありましたが、学校、保護者、児童生徒の納得感を大切にしていただくようお願いします。教育信条の中では、「変化を恐れない」のほか、「風通し」「教師にやりがい、達成感を感じさせること」や「人を活かす」といった人材育成や組織経営などを大事にしている傾向にありました。どの校長先生のお言葉からも多くのことを学ばせていただきました。

ＩＣＴの活用について

「令和の日本型学校教育」を構築し，全ての子供たちの可能性を引き出す．個別最適な学びと，協働的な学びを実現するためには，学校教育の基盤的なツールとして，ICT は必要不可欠なものである。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）

それでは、内容の一つ目「ＩＣＴの活用について」申し上げます。このシートの四角囲みは、令和３年１月26日に中央教育審議会から示された答申、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」から抜粋したものであります。「令和の日本型学校教育」の構築のためには、ＩＣＴは学校教育の基盤的ツールとして、必要不可欠であるということが明記されています。ＩＣＴの活用が大前提であることを改めて確認させていただきます。このことは、昨今の急激なＩＣＴ化、コロナによる社会の急速な変化などから、皆様方も実感しているのではないでしょうか。



ＧＩＧＡスクール構想による、一人一台端末と高速大容量の通信ネットワークの活用に関わり、これまでの様々な事例発表や学校訪問などから、円滑に導入している学校の例を示しました。まず一つ目は、教員が業務で活用していることを授業で生かすことです。教員が便利さ、よさを実感したものを授業で活用するのです。例えば、チャットや共同編集などがあります。

二つ目は、操作は子どもからも学ぶことです。全て教員が教えるといった考えは払拭しましょう。操作については、子どもの方が、早く覚え、よく記憶しています。さらに、過度な規制はしないことも大事なことです。子どもが、ある程度自由に活用することにより、操作に慣れ、発想が広がります。

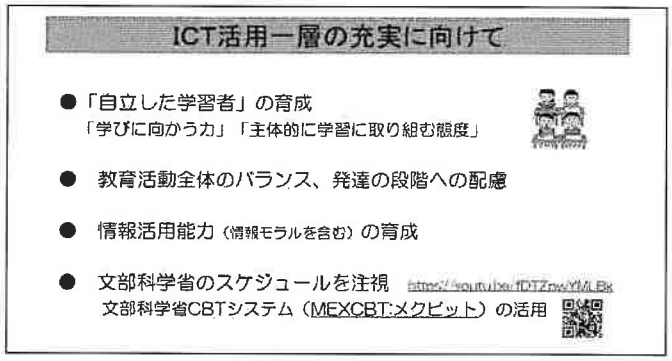
三つ目は、上手くいったことを続けることです。裏返せば、上手くいかないことは止めることです。ＧＩＧＡスクール構想のゴールは、はっきり見えません。進んでいく中で、更に可能性が広がることもあります。したがって、試しながら進めていくということが大事です。トライアンドエラーの繰り返しです。試行錯誤しながら、上手くいったことを続け改善していくのです。

四つ目は、「つながる」をキーワードとすることです。子ども同士、教師同士、子どもと教師、子どもと保護者、教師と保護者、また社会とつながることを活用の中核としています。

五つ目は、技術に詳しい人より「活用に詳しい人」を中心にした推進です。ＧＩＧＡスクール構想は、全ての子ども、教師が活用することが前提です。高度な専門性より汎用性が重視されなければなりません。このことは、ＩＣＴ導入期においては特に重要です。したがって、端末の技術に詳しい人も大切ですが、それ以上に活用に詳しい人、授業で上手に使える人をより中核において推進していくことが重要です。

最後は、みんなで考えながら進めていくことです。特定の教員に頼りすぎないで、対話したり、互いに教え合ったりしながら取り組んでいくことです。そのためにも分からないことを分からないと言える風通しのよさが求められます。

このシートは、授業での主なＩＣＴの活用例です。「拡大する」「撮影する」「保存する」「観る」など、学校では先生方が様々な工夫をして端末やクラウドを活用されています。２～３列目の「情報収集する」「調べる」「整理する」「分析する」「発表する」をご覧になって、何か気付くことはございませんか。これは、総合的な学習の時間の探究の過程と軌を一にするものです。したがって、取組が進んでいる学校では、社会や総合の探究的な学習でより効果的に活用している傾向にあります。



ＩＣＴ活用の一層の充実に向けて四点お話しします。このことについては、８月５日の校長会と道教委との懇談会で話題になった「ＧＩＧＡスクールは今後どのように進んでいくのか」ということに関連しています。これが現段階で取り組んでいただきたいことです。

一つ目は、「自立した学習者の育成」です。激しい変化の時代では、自ら新たな知識を獲得し、それを活用していくことが求められます。こうした意味からも今求められているのは、「自立した学習者」の育成という視点です。これは、ＩＣＴの活用に限ったことではありません。学習指導要領では「学びに向かう力」、学習評価では「主体的に学習に取り組む態度」が関連した新たなキーワードです。そのためには、子どもたちが自ら端末を道具として効果的に使いこなし、自分たちで学んでいけるようになることが重要です。現在は、導入期でもあり一斉授業の中で教師の指示で活用することが一般的ですが、これからは、子どもが自分で使いこなすことが大切で、現在、大人が仕事で使うことと同じように、自分なりに使いこなすことができる力を育てていくことが大事なのではな

いでしょうか。そのためには、探究的な学習などで、自分たちで学んでいく経験をさせることが特に重要です。このとき、孤立しないこと、支援の必要な子どもに配慮することなどは言うまでもありません。

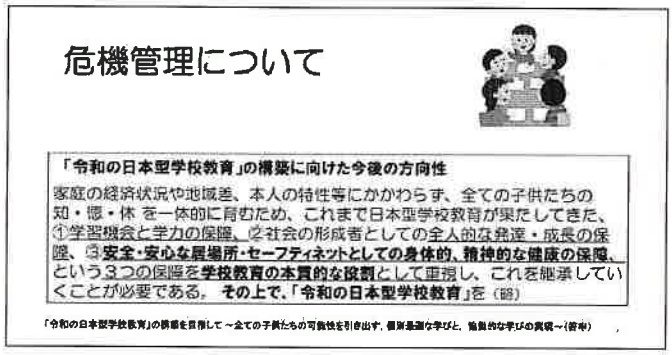
二つ目は、教育活動全体のバランスや発達の段階への配慮です。学校には、教育活動全体を眺め、体験活動と座学のバランスはもとより、一斉、グループ、個別の各学習形態のバランスに配慮した教育課程の編成が求められます。また、低学年、中学年、高学年、それぞれの発達の段階に応じて学習活動を展開することが重要であります。その学年に応じた時間や使い方などを是非配慮していただきたいと思います。特に、低学年は体験学習が必要な時期ですので、十分ご配慮願います。

三つ目は、情報活用能力の育成です。情報活用能力には三つの視点があります。キーボード入力などの基本的なスキルはもとより、情報モラルも含めて育成していただきたい。学校では、そのためのまとまった時間を生み出すことは容易ではありませんが、カリキュラム・マネジメントにより時間を確保していただくことをお願いします。

最後は、文部科学省のスケジュールを注視していただきたいことです。

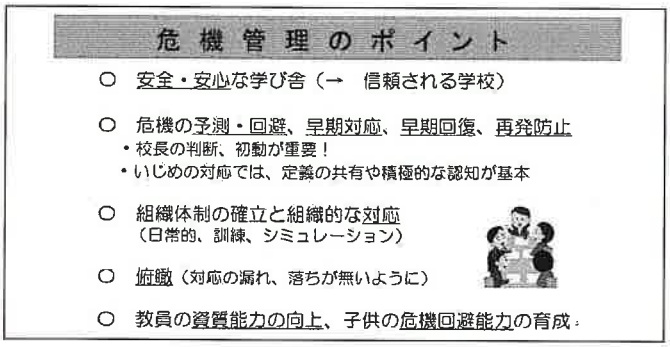
「教育ＤＸについて」文部科学省が示した資料をご覧ください。文部科学省では、教育ＤＸについて三段階で考えています。これまでは、ＧＩＧＡスクール構想による端末整備やデジタル教科書の普及などに力を注いできた第一段階（電子化）でした。現在は、第二段階（最適化）に入ったところです。太線の四角で囲った部分が具体的な取組ですが、その中に文部科学省と学校をつなぐ仕組みＭＥＸＣＢＴ（メクビット）が示されています。これは、子どもの個別最適な学習をはじめ、学校の業務や行政の施策などに関して有益な情報を得るために必要なものです。

来年度の全国学力・学習状況調査は、中学校外国語の「話すこと」をＭＥＸＣＢＴを使って実施する予定です。小学校も再来年度からは質問紙調査で活用する予定です。各学校は、教育委員会と連携して早急に整備していただきますようお願いいたします。詳しくは前シートのＱＲコードをご覧ください。



続きまして、「危機管理」についてお話し致します。この四角囲みは、先に示した答申から引用したものです。今後も、安全・安心な居場所・セーフティネットとしての身体的・精神的な健康の保障を、学校の本質的な役割として重視することは、変わらずに継承され、その上で「令和の日本型学校教育」が構築されるということを、改めて皆様と確認させていただきます。

こうした考え方を踏まえれば、安全・安心を保障する「危機管理」は、学校経営において重要な取組であります。



危機管理のポイントについては、五点ございます。

一つ目は、学校は安全・安心な学び舎であることが大前提ということです。「今日もいじめられるのではないか」と不安な気持ちで登校している子どもはいないでしょうか。こうした子どもが落ち着いて勉強できるはずがありません。もちろん学力も十分身に付かないでしょう。校長は、まずは、子ども、先生にとって安全で安心な環境をしっかりつくってあげることが重要です。このことが、地域や保護者からの信頼につながります。

二つ目ですが、危機の予測・回避、早期対応、早期回復、再発防止のプロセスを大切にすることです。改めて学校全体で確認、徹底願います。このプロセスにおいて、校長の判断、初動が重要であることは多くの事例から明らかであります。いじめについては、皆様方にお配りした資料１の令和４年６月１日の道教委通知（教生学第214号）にいじめの認知や早期発見、早期対応などに詳しく示してありますので、ご確認ください。

三つ目は、組織体制についてです。対応する組織体制

を確立するだけではなくて、対応の訓練やシミュレーションをしていただくことが重要です。危機が発生して実際に対応するとき、事前にこれをやっておいたか否かで、かなりスピード感が違ってきます。

最後は、具体的な危機への対応はもとより、危機が発生しなくても、危機の予測・回避、シミュレーション等を通して教職員の危機管理能力等の資質・能力を高めていただきたいことです。また、子どもについては、教師の指示に従うことも大切ですが、自ら危機を回避する能力も高めていただきますようお願いします。

トピック　今日的な教育課題等

- 新しい研修制度
  （資質能力に関する指標、研修履歴、教職員との対話と指導助言）
- 健康問題（視力低下、むし歯、肥満、生理用品　等）
- ヤングケアラー（本人の自覚、福祉部局との連携）　【資料2】
- 通学路の安全確保（交通安全プログラムに基づく取組）
- 重いランドセル（健康面、安全面の配慮）

次はトピックとして、道議会や道の教育委員会で話題になっていることを紹介致します。

教員免許更新制の廃止に伴い新しい研修制度が確立されました。今後は、教員育成指標が変わります。教員がそこで示された資質・能力などを高めるために、研修履歴を踏まえ、校内外の研修に参加するなど自己研鑽に努めることが一層大切になります。その際、校長先生は教員と対話して指導助言をすることとなっております。

また、健康問題では、視力の低下、虫歯、肥満のほか、生理用品の学校での常備などが話題になっています。

ヤングケアラーについては、先般、小学校で調査いたしました。ご協力いただきありがとうございました。ヤングケアラーは、本人が、兄弟姉妹などの世話をすることを当たり前だと思って自覚していないことが課題となっており、また、必要な支援は、福祉部局と十分連携して進めることが重要であることも指摘されております。資料２の令和４年８月１日の道教委通知（教生学第492号）において、研修動画を紹介しておりますので、ご活用ください。

そのほか、通学路の安全確保では、交通安全プログラムに基づく取組が重要であること、また、ランドセルが重いので健康面、安全面に配慮が必要であるということなどが話題になっています。

加えて、英語教育については、「英検ＥＳＧ」が今年度から小学校で実施されます。

なお、一点、情報提供いたします。登別明日中等教育学校入学試験に関わり、今年度の面接試験から英語の簡単なやりとりを取り入れますので、ご承知おきください。

おわりに

○ **学校経営のデザイン**
- 当面する課題の解決 → 学校経営**方針**を基盤とした**全体像の明確化**

○ **リーダーシップ**
- リーダーとしての**立ち居振る舞い**（正しいメッセージの発信）
- 腹落ち（納得）、通訳、方針の明確化、**見える化**
- まずは、管理職、主幹教諭、主任等の**チームワーク**
- **「やりがい」、「満足感」**を感じさせ、**「負担感」を軽減**する
- **一石二鳥、三鳥**
- 校長は「人を介して目的を達成」するが、**フォロー**を大切に
- **限られた条件**の中で**「納得解」、「最適解」**を見つけること

終わりに、学校経営のデザインとリーダーシップについてお話しします。

校長先生は、日々、目の前の様々な課題に対応されご苦労されていると思います。本当にお疲れ様です。こうした一つ一つの課題解決について、校長として、広い視野からとらえていただきたい。例えば、今行っている課題解決は学校経営の重点や方針とどのように関連しているのかなどを確認して教職員と共有して進めていただきたいのです。言い換えれば学校経営をデザインすることです。校長は、学校経営の全体像を俯瞰して、それぞれの活動の関連を意識して推進できる立ち位置にいます。

次に、リーダーシップで大切な考え方をお話しします。校長先生方はリーダーとしての立ち居振る舞いに気を付けていらっしゃると思いますが、教頭をはじめ教職員の模範であることを改めて意識していただきたいです。また、学校全体で新たな取組を行う場合、まずは、校長がその内容を納得し、学校の方針との関連を分かりやすく「見える化」し説明することが大切です。次に経営方針を浸透させ学校が一体となるためには、まずは、管理職、主幹教諭、教務主任とのチームワークが大切です。このチームで浸透できなければ学校全体に広げることは困難ではないでしょうか。校長は、目の前の教職員のよさを引き出し、最大限の成果を上げることが、重要な役割です。そのためには、教職員に「やりがい」「満足感」を感じさせ、「負担感」を軽減する取組が重要です。次に、「一石二鳥、三鳥」という考え方です。予算も人も時間も限られていますので、是非、この考え方を意識して、働き方改革にもつなげていただくことを願っています。

「校長は人を介して目的を達成するお立場」です。人を介してということは、人に任せることなのですが、任せっきりではなくて、フォローとフォローアップを大切にして、丁寧な人材育成に努めていただきたい。

最後です。これからも難しい判断を迫られる場面が多々あると思いますが、人、時間、予算、情報など限られた条件の中で、その時点で納得できる「納得解」や「最適解」を見付ける姿勢が、一層大切になると考えます。

校長会の皆様には、参考にしていただき、一層ご活躍されることを祈念いたします。ありがとうございました。

当面の諸課題

全国連合小学校長会長
大字　弘一郎

会場の皆様、オンラインで参会の皆様こんにちは。全国連合小学校長会で会長を務めております大字弘一郎と申します。どうぞよろしくお願いします。昨年はオンラインで参加させていただきました。今年は、とにかく北海道に行きたくて、この一週間、毎日天気予報とにらめっこしていました。

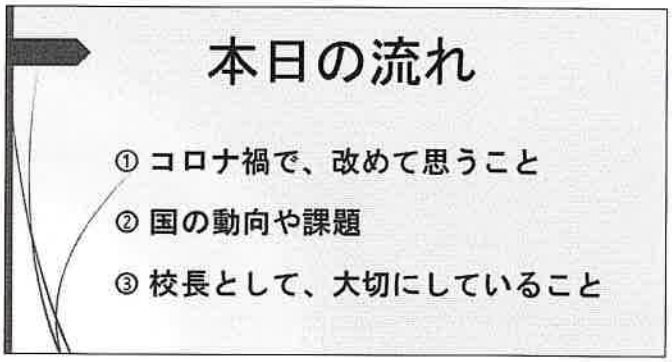
紺野会長、石前実行委員長をはじめ、北海道の校長先生方、そして何よりも旭川の校長先生方に、心からの敬意と感謝をお伝えしたいと思いました。

ハイブリッド開催を実施するのは、言葉はとてもかっこいいですけれど実際には大変です。私は、よく小泉全連小事務局長に「会長は、いろいろなことをやりたいと言うけれど、ハイブリッドは大変ですよ。事務局のことを考えた方がいいですよ。」と言われるのですが、準備から大変だったことと思います。それを、前向きに、当たり前のようにやってくださったとお聞きして、「素晴らしいな。」「北海道のパワーだな。」「旭川の底力だな。」と思いました。

何年前でしょうか、全連小の函館大会があって、私も参加させていただきました。分科会の充実が本当に素晴らしかったことを実感しました。分科会で皆で話し合ったことを、一枚のフリップでまとめて発表したシーンが素晴らしかったと思い出されます。

3年振りに分科会が実施されるとのことですが、とにかく校長の研究は、分科会が全てというか、分科会に一番重要なエッセンスが詰まっているので、今回こういう形で進めていただいたことに、もう一度感謝を申し上げたいと思います。

今日は当面の諸課題ということでお話ししますけれど、とにかく今の課題は、元気な学校を創るということです。間違いなくこれが課題です。先生を元気にして、元気な学校を創るということ、ここに集約しなければと思っています。



今日はこのような流れにしました。

コロナ禍でここ数年、改めて思っていることがあります。その一つですけれども、関東近郊のある校長会の会長が「大字会長、このところ校長会をすると、若手の校長が校長会の情報交換になると、帰りたそうな顔になります。『なぜ情報交換なんかやるのですか、無駄な時間じゃないですか、そんなことよりも早く学校に帰りたいです。』と口に出す人もいれば、口には出さないけど顔には出す人もいる。これはどういうことなのか。」と言うのです。校長は学校の最終判断を下す人間です。子どもの生命を預かっているし、子どもの成長に大きな責任がある。教職員の人生を預かっている訳です。その校長が自分だけのちっぽけな判断で決断していたら、いいことは何もないと考えています。本来は校長が参集して、皆でいろいろな意見を交流し、情報交換しながら自分の知見を広げ、それを学校経営の決断につなげていくことが重要だと思っています。オンラインもいいですけれど、オンラインだと本当に大事なことは聞けないです。「うちの学校の問題は○○で、なんとかしたいのだけど。」みたいなここだけの話は、参集してそばにいなければ聞け

コロナ禍で、改めて思うこと

- 学校王国になっては、いけない
- 校長会でなければ、できないことがある

ません。参集して本当に聞きたいことを聞く環境をどのように創っていくのかが校長会の使命だと思っています。学校王国になってほしくないのです。ベテランの校長先生は大丈夫だと思いますけれど、昇任したての校長先生、若手の校長先生を見ていると、自分の周辺だけで学校を創っていないか、昔の学級王国のようなことを校長がやっていないか、と思うことがあります。学校王国になってほしくないというのが一つです。

もう一つは、校長会でなければできないことが必ずあると思うのです。

コロナ禍で、改めて思うこと

人生は、クローズアップで見れば悲劇だが、
ロングショットで見れば喜劇である

＜チャップリンの言葉より＞

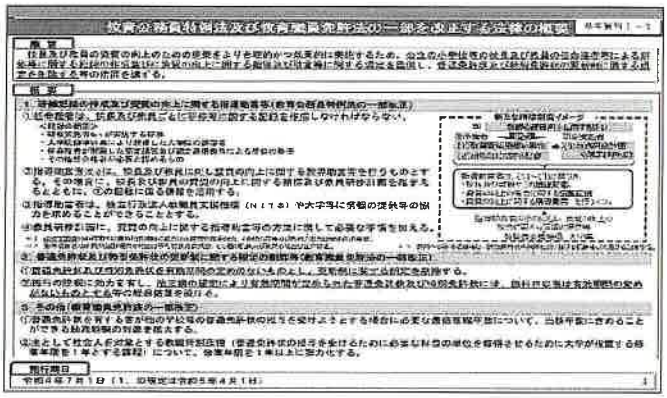
これはチャップリンの言葉ですけど、「人生は、クローズアップで見れば悲劇だが、ロングショットで見れば喜劇である」。コロナ禍で次から次へと、難題や困難が出てきます。目の前ばかりに集中していませんか、眉間に皺が寄っていませんか。校長が怖い顔をしていると、職員が大体不安になります。あまり不安にさせるのはよくない。引いて見ると、長いスパンの中では、ほんの一つの通過点です。笑ってすませることができると思うのです。校長がゆったりと構えていると、職員は安心します。職員が安心すればするほど、子どもにも伝染していきます。子どもが安心すれば、その姿を見て親も安心します。学校が好循環に入っていきます。ロングショットで見ることは、ものすごく重要だと私は思っています。一つ一つの課題に、眉間に皺を寄せていたら、よい学校経営はできないのです。

次に、国の動向や課題について話をします。まずは、教育職員免許法が、7月1日に改正されました。ここにいる私たち全ての免許は、有効期限がなくなりました。このことについて、全ての教育団体で一番頑張ったのは全連小です。私は中教審のヒアリングを、全連小対策部長の時に受けました。全連小としては、はっきりと「廃止してほしい。」と言いました。「先生たちにいいことはない。もっと先生たちを信じて任せてほしい。」と言ってきました。そして、やっと廃止になりました。これで、何百万人という免許が生き返りました。これはすごいことだと思っています。ただし、生き返った免許を現場に戻さなければ意味がないので、もう一回頑張りたいと思っています。

法改正等の動向

① 教育職員免許法の改正　R4.7.1
② 教育公務員特例法の改正　R5.4.1
③ 条例改正（定年引上げ、役職定年制）
④ 次期教育振興基本計画（R5~R9年度）

これとセットで教育公務員特例法の改正がなされました。ここのポイントは、セットだということです。本来は免許法改正だけでいいはずです。ところがなぜか教特法が改正されました。これは、世の中に不安があるからです。免許更新制度がなくなったら、「先生たちは勉強しなくなるのではないか。」「研修しなくなるのではないか。」「それに伴って教員の質が落ちるのではないか。」という不安があります。私は、国会議員の文部科学部会に行って、「そんなことはない。」と1時間ぐらい話しました。そういう不安や危惧があることを、私たち校長は理解しておかなければならないし、今度の研修制度が変わったことに対して、何よりも本気で取り組まなければならないと思います。最低でも年に2回は全ての教員と面接を実施し、「どのような研修を受けたいのか。」「今後どんなキャリアを積みたいのか。」「どんな力を伸ばしたいのか。」を面接できちんと聞いて、年度末の最後には振り返りをしてほしいと思います。日本の全ての学校で、全ての教員に対して、校長がきちんと実施するというのが法改正です。私は、東京都なので年に3回の面談を実施しています。期首、中間、期末です。国のガイドラインでは少なくても年に2回は面談を実施することが示されています。資料を付けていますのでご覧ください。


教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律の概要

もう一つは、資質の向上に関する指針の改定がなされました。今までは教員の指針でしたが、教員の資質をどのように上げるかという指針に、別途校長の指針が付きます。教員の指針には、二つ重要なことがあります。一つはＩＣＴです。もう一つは特別支援教育で、この二つが付いています。この二つは、面接で力を入れた方がいいと思います。

校長の指針は、アセスメント能力とファシリテーション能力、これは今まで私たちが当たり前のようにやってきたことだと思います。ただし、今までそういうことを、管理職研修でしっかりとやってきたのか、そういう研修を受けて私たちは校長になってきたのかを振り返らなければなりません。校長会の研修として、校長会が主導で、創り上げて行かなければならない気がしています。

他には、条例改正です。これは、北海道はどうですか、定年引き上げと役職定年制に対しての指針が出ましたか。東京は６月議会で条例が出て、定年は令和５年度から上がっていきます。気になる役職定年制に関しては、とりあえず再任用校長という今の制度を認めて、そのまま継続するという形になりました。「給料は７割」「責任は10割」とりあえず東京はそういう形になっています。

地方公務員法の改正によって、それぞれの自治体で、条例改正することになっていますから、北海道がまだなら関係機関にかけあって、できる限り役職定年制の特例が認められるような方向がいいかなと思っています。

今、次期教育振興基本計画の策定が行われています。これは文部科学省のホームページを見ていただくと、経緯が出ているので、ご覧になってください。

これ以外にもいくつかあります。一つは生徒指導提要が改訂になりました。12年振りの改訂です。私も委員でしたが、あれだけメディアに取り上げられるとは思いませんでした。しかし、現場の小学校教員はあまり知りません。生徒指導提要とは何かを知らないのです。これは、今回は通用しません。あれだけマスコミが取り上げているのですから、どこの学校でも先生方に生徒指導提要とは何かを教えてください。今回の改訂では、テキスト版が出るので、先生方がもっている端末にダウンロードして、いつでも見られるようにするといいと思います。なぜこんなに取り上げられたかというと、一つは、児童の権利条約です。それから、いわゆるブラック校則と言われるような校則のこと、体罰のこと、いじめのことが相当書き込まれているので、マスコミが取り上げました。最後の委員会で私が話をしたのは、「小学校の教員が知らないので周知に努める。」ということです。ただし、これは教員だけが分かっているだけでは意味が無いので、「保護者や地域にも積極的にダウンロードを進めるなどの周知をしてください。学校と保護者と地域が、同じ土俵で子どもの成長を後押しできるような、そういう形にしなければならないと思っています。」という話をしてきました。

あと、部活動の地域移行です。中学校のことですが、これを小学校の先生方は知りません。運動部活動は令和５年度から土日は、地域に移行するというスケジュールで動いています。こういうことも小学校の校長は知っていないといけないと思います。部活動は中学校だから関係ないという話にはならないのです。これは、文部科学省の仕切りなので、公立には縛りがかかりますけれど、私立には縛りがかからない可能性が高いと思います。このことで、何が起きるかというと、学校５日制が始まったときに、私立は週に６日間の授業をやりました。東京は正にそうだったのですが、子どもが、私立にたくさん流れたのです。校種の格差が生まれたのです。これと同じことが部活動でも起きるかもしれないという危機感を公立小学校の校長はもたなければなりません。そうならないように全連小としての意見を、文部科学省に届けなければならないと思っています。

また、文部科学省の令和５年度の概算要求が出ていますので、これも文部科学省のホームページをご覧ください。今までとほとんど変わっていません。35人学級や教科担任制で５千人強の定数改善があります。ところが自然減が６千人を超えています。マイナスになっています。もっと定数改善は強く言わなければならないと思っているところです。

一番大きな問題はこれです。深刻な教員不足、これは文部科学省が昨年実施した、全国実態調査の結果が出ているものです。今年のＮＨＫの調査ではもっと多くなっています。

小学校教員採用選考の倍率ですが令和３年度は過去最低です。令和４年はもっとひどいと思います。全国的に

深刻な教員不足

◆ 文科省による初の全国実態調査

・4月始業時 1,218人 4.9%の小学校で欠員

・病気休職、産休・育休、教員採用選考

大変な状況だと聞きました。東京都は過去最低の2.5倍です。まだ、他の自治体よりはいいかもしれませんが、東京都は地元と東京都をどちらも受けて、地元が受かればみんな地元に行きます。民間にも流れます。ですから2.5倍は危機的水準をはるかに超えています。危ないことになっているので、東京都の人事部ともいろいろな話をしています。ここでなんとかしないと、管理職が担任をしたり、授業したりするなどということにもなります。実際、私の学校の近くの校長先生は担任をしていました。算数を当たり前のように教えていました。これで、学校経営ができるのかなと心配になります。

深刻な教員不足

◆ 令和3年度採用の小学校教員採用選考

・2.6倍（2.7倍）　過去最低

・臨任教員の不足、管理職が担任や授業

深刻な教員不足

◆ ありとあらゆる対応を

・採用選考制度の抜本的な見直し

・日本育英会「返還特別免除制度」の復活

深刻な教員不足解消のためには、ありとあらゆる対応をやらなければなりません。一つは、「採用選考制度の抜本的な見直し」です。東京都に継続してお願いしているのは、採用選考のスケジュールの前倒しです。民間は6月に内定が出ます。3分の2は内定が出ます。そんなに内定が出ているのに、採用選考は1次が7月です。これでは勝てるわけがありません。現場の努力では、なんともなりません。東京は7月に1次試験、8月に2次試験、10月に合格発表、3月に赴任先が決まる。その間に、どんどん民間に就職したり、他の自治体に行くのです。これを変えないことには、安心して先生になろうとは思わないのです。ですから、3年生の秋に1次試験を実施して、民間の内定の少し前に合格を出して、合格後にインターンで現場経験させてあげてほしいと思っています。学生にとっても、3月に赴任先が決まり、4月からすぐに就職では、不安でしょうがないと思います。しかし、6月に合格が決まれば、6月から3月の間に現場経験を積んで、少しは安心して4月から先生になれるのでないかと思います。

また、学校現場も、その人の特性を見て、この人は3年生の担任ならできるかな、5年生の担任ならできるかなとか、そのようなことも校長サイドとして考えられるのではないかと思います。他にもありますけど、東京は正規合格と期限付合格という名称の補欠合格があります。補欠合格がどんどんいなくなります。そうすると4月以降、休職に入る先生の後補充がいません。これをなんとかしたいと思っています。4月に就職先が決まっていなければ、補欠だったら辞めてしまいます。東京都にお願いしているのは、例えば年度途中で育休に入ることが決まっている先生の学級に、育休に入る担任と補欠者で複数担任にする。そこから、担任を交代するという制度にする。このようにすれば、補欠合格の人も安心して就職できるし、育休を取る先生も安心して育休が取れます。校長も安心して引き継ぎができます。年度の途中では人が見つかりませんので、電話を何百本もかけることになります。このようなことが少しは改善できるだろうと、都教委とも継続して話し合っています。東京都が先陣を切れば、全国に広がると思って、私も必死です。難しいことです。でも頑張ります。

次が、日本育英会の「返還特別免除制度」の復活です。以前は、先生になれば奨学金を全部返さなくてもいい制度がありました。私も奨学金をもらっていました。それで先生になりました。この制度を復活してほしいと、都教委に継続してお願いしています。予算が伴うので都議会の各派を回って、議員さんに「本当にお願いします。」と言っています。

もう一つは、「都立高校に教職コースをつくってほしい。」とお願いしています。高校から人を集めるのです。そして、推薦枠を活用して大学に入学してもらい、奨学金制度で先生に就職してもらう。そのようなルートを考えなければいけないという話をしているところです。

次は、若手の先生やこれから先生になろうとしている人たちを指導するときのヒントになると考えてページを作りました。教育新聞のアンケートからです。対象は教職課程に在籍している学生や先生を目指している学生です。

「なぜ先生を目指したのか」と言うと、圧倒的に多いのが「出会った教員がきっかけで教師を目指した。」です。本校の教員もほとんどこれです。「6年生の先生方が好きだった。3年生のとき学校が楽しくて、あんな思いを自分が先生になってさせてあげたいと思って小学校の先生を目指した。」これは、うれしいことだと思います。

恩師への憧れが志望のきっかけに

- 出会った教員がきっかけで教師を目指した
- 教員という仕事に魅力を感じた
- 子どもや学校への思いから教員を目指した

次は「教員という仕事に魅力を感じた。」です。次が「子どもや学校への思いから教員を目指した。」です。一番上のように、やはり先生が元気で魅力的じゃないと、次の先生は生まれないことを改めて思うのです。大事なことは、学校を元気に、先生を元気にすることです。

教師教員の仕事する上での価値観

「子どもたちのため」と「私生活重視」

- 子どもたちのためにできることをしたい
- プライベートな時間を大切にしたい
- 働いた分だけ対価を得るべきだ

「教師教員の仕事をする上での価値観」についてです。「子どもたちのため」と「私生活重視」の二つが出てきます。これが今の若い人たちで、先生になって、「子どもたちのためにできることがしたい」が98％ぐらいです。思いは我々とほとんど変わらないです。でも、下の二つも多いです。「プライベートの時間も大切にしたい」「働いている分だけの対価を得るべきだ」これらも90％を超えています。これらのことから、私たちの感覚よりも、もっとしっかりと働き方改革をしなければならないと思います。「ブラック感」を「ホワイト感」に移していかないといけないし、給特法の改正も必要なのかなと思います。今の働かせ放題の状況ではだめだと思います。でも、よほど上手く法改正しないと、管理職の仕事が膨大に増えて、今度は教頭のなり手がいなくなります。倍率0.5倍とかになってしまうと、校長が兼務みたいなことになります。制度設計が難しいので、この改正には時間がかかると思うのですが、次の先生たちを思うと必要なのかなと思います。

教職の魅力「子どもの成長」

- 子どもの成長に間近でかかわることができる
- 知識や技量次第で、授業を自由に展開できる
- 授業や学級経営など、ルールがありながらもアレンジが効く

教職の魅力は「子どもの成長」です。「子どもの成長に間近でかかわる事ができる」ことと、「知識や技量次第で、授業を自由に展開できる」こと、この二つは、とても大事だと思います。「授業や学級経営など、ルールがありながらもアレンジが効く」毎日の授業では、これはすごく重要です。

私たち校長は、とても勘違いしているところがあり、校長の学校経営を実現するのが教職員であると、そんな思いがありませんか。本来は、教職員一人一人がやりたい教育の後押しを、汗をかいて実現させてあげるのが校長の仕事じゃないのかと私は思っています。また、そうでありたいと思います。先生がやりたいと思っていることを、一生懸命に環境を整えてやらせてあげる。校長の学校経営の実現のために、先生たちが駒として動くのではないと私は思っています。この辺も学校経営を考えるときに、大きなヒントになるのかと思って載せておきました。

校長として「大切に」していること

校長として大切にしていることを、少しお話ししたいと思います。せっかくの機会ですので、私が学校で行っている話をさせてください。

一番話したいことはこれです。「シンプルなことをやり

続ける」とても簡単なことですが、シンプルなことを続けています。

「シンプルなことをやり続ける」

- ◇「毎朝、校門に立って、あいさつをする」
- ◇「毎日、授業風景をホームページにアップする」
- ◇「毎週、校長室通信・コラムを出し続ける」

一番は「毎朝、校門に立って、あいさつをする」です。「おはよう。」と声をかけながら30分くらいは立っています。子どもたちは、登校時にマスクをしています。「マスクを外しなさい」と言ってもマスクを着用しています。校長がマスクを外して「おはよう、マスクを外そうね。」と言っていますが、６年生の女の子に「校長先生、もう素顔を見せられません。」とも言われました。

次ですが、「毎日、学校中を歩き回り、授業風景を写真に撮り、ホームページにアップ」しています。全学年の写真を撮っています。よろしければ下北沢小学校のホームページをご覧ください。

今週の月・火曜日と移動教室に行ってきました。約150枚の写真を撮ってアップしました。写真をアップすると、保護者が安心してくれます。これがとてもいいのは、校長がｉＰａｄを持って教室に入ると、子どもはホームページにアップされたいので、自然と授業態度が良くなります。先生たちも校長がいつ来るか分からないので、自分の授業がホームページにアップされることを意識して授業するようになります。これを頑張って毎日やっています。

もう一つは、「毎週、校長室通信とコラムを出し続ける」ことです。毎週金曜日に、Ａ４表裏で出しています。以前は毎週コラムを書き続けていました。今は時間が取れなく、毎週書いてはいられないので、時間があったときに書きためて、毎週出すようしています。

次は、「管理職としての基本姿勢」です。「教職員の家族の顔を想像」しながら教職員と接するようにしています。

例えば、副校長先生や教頭先生に、強い指導をしなければいけないときも校長ですからあります。そのときに、副校長先生や教頭先生の家族の顔を想像して指導するようにしています。大好きなお父さんとして尊敬しているお子さんの顔を想像すれば、選ぶ言葉が変わってきます。このことは校長に昇任して以来、とても大事にしています。

また、若手の先生に言いたくなることもありますけど、

「管理職としての基本姿勢」

- 教職員の家族の顔を想像する
- いつも機嫌のよい人でいる

若手の先生を育てたお父さんやお母さんがいます。その前で言えないような言葉を使ってはいけないという思いが強いのです。いつも機嫌のよい人でいたいのです。

人材育成は、管理職の仕事の中で大きな柱の一つです。人材育成はとにかくオーダーメードが大事だなと思います。一人一人に合わせることです。一つは、授業観察記録を作っています。５段階評価のようなことはしません。まるでラブレターを書くかのように、「あなたにこれを伝えたい」という授業観察記録を書くようにしています。

「管理職の仕事：危機管理」

- 「一報の壁を低く」
- 「自分から情報を求める」
- 「教職員の一生懸命さ」こそが危機管理

もう一つ校長の仕事で大事なのが危機管理だと思います。その中で大事なのは、第一報の壁を低くすることです。先生たちが何か報告に来ますが、中には拙い報告もありませんか。何を言っている分からない報告に、「一体何それ、あなたの報告は５Ｗ１Ｈ揃ってないからやり直せ。」などというと、きっとすぐには報告しなくなります。危機管理で一番大事なのは、私はスピード感だと思っています。事件が起きて、どれだけ速く情報が入ってくるかが重要です。情報が入りやすい環境にするためには、精度が重要ではありません。「校長先生、あそこで何か起きていますよ！」。この言葉が、あっという間に入ってくるのが最高の危機管理だと思います。そのために私は、校長室の扉を全開にする、ノック不要、いつ入ってきてもよい、校長室はフリースペース、ワーキングスペース、校長がいても作業をしていいなどとしています。校長室を入りやすい空間にしていくのが大事だと思っています。

そして、一番の危機管理は、先生たちが一生懸命なことだと思っています。先生方が一生懸命やることが最高

の危機管理です。それを子どもが分かって、親も分かって、地域も分かってくれれば、やっぱり違います。同じ事が起きても、全然最初の対応が違います。やはり、先生方が一生懸命働けることや気持ちよく働けるような職場にするというのが、校長のとても大きな仕事だと思っているところです。

「学校経営を考える」

ヒト：人事　モノ：設備　カネ：予算

- 「ヒト」自分自身、校長自身
- 「モノ」教職員や地域人材
- 「カネ」信頼、信用、ブランド、評価

次は、「学校経営を考える」です。以前、教育委員会の課長をしているときに、教育委員さんに民間の社長の方がいました。次年度の教育委員会の目標を作成するときに、「校長の学校経営力を伸ばす」と書きましたら、民間の社長だった教育委員さんにとても叱られました。「『学校経営』とは何事だ、あなたは現場から来たのでしょう。学校現場から来たあなたが、『学校経営』という言葉を使ってどうするのですか。経営というのは、ヒトとモノとカネが全部自由になって、初めてできるのです。そんな権限は校長先生たちにはないだろうし、そういう権限しか与えていないのに、軽々しく経営と使うのですか。」と。その時は、口ごもりながらもなんとか返答しましたけれど、自分の中で全然納得がいっていませんでした。

今は、このように思っています。ヒトが自分自身、校長自身だと考えるようにして、これならば自分を磨けば、少しは高まっていきます。際限なく行くかどうかは分からないですけど、ヒトは自分だと考えています。

モノですが、設備に差はあります。私の学校は建築後5年ですのでピカピカですが、学校によって設備には差があります。それではどうするかですが、モノは教職員や地域人材と今では考えています。先生方を一生懸命に育成して力を付けさせることや地域の人とコネクションをつくり、地域の人をたくさん学校に集めることがモノだと考えています。カネは、信頼とか信用とかブランドとか評価とかそういったことがカネなのかと考えています。自分なりに、学校経営のヒト・モノ・カネを考えているところです。

次は、「私は、こうありたい！」と考えていることです。トムソーヤの冒険のペンキ塗りの話が好きです。トムソーヤがペンキ塗りをさせられます。とっても単純でつまらないので、最初は嫌々やります。誰も手伝ってくれないので、トムソーヤはいろいろ考えて、とても楽しそうにやることにしました。「うわ、おもしろいな、こりゃいいや！」みたいな感じでやると、回りからどんどん人が集まってきました。「僕にもやらせて、私にもやらせて。」と行列ができるぐらいです。校長の仕事も同じかなと思っています。すごく楽しそうにやっていると「校長先生、いつも楽しそうですよね。」と言われます。「やせ我慢だけどね。」と言いますけど、校長が楽しくやっていないと、後に続く者は増えないだろうと思っています。教師不足の根本は、校長のしかめ面だと思うので、いつもトムソーヤでありたいと思っています。職員室では、いつも機嫌のよい人を心がけています。職員室内を歩いて「元気？悩みない？最近私に話しかけてくれないね。」と、ハラスメントにならない程度にたくさん話しかけるようにしています。なかなか学校にいられないことも多いので、学校にいる時間はたくさん話しかけたいと思っています。いつも機嫌がよく見えるくらいの校長がいいなと思います。できれば副校長も機嫌がよく、校長も副校長もいつも機嫌がよく見えるくらいなら、学校の中もゆとりがあって、いいかなと思っています。

「私は、こうありたい!」

- 「トムソーヤの冒険」　ペンキ塗りの話
- 目指すは「ウィン・ウィン」

もう一つは、目指すは「ウィン・ウィン」です。学校だけではなく、保護者だけでもないし、関係機関だけでもない。相手に文句があっても、文句だけ言っても始まりません。みんなで「ウィン・ウィン」になれるような、そんなスタンスで学校運営を進めていきたいなと思っています。

今、「先生に元気がないと困るのは子ども」と言うキャンペーンをしています。あちこちで、このキャンペーンを話し続けています。保護者や地域や教育委員会や議員さんたちに「先生に元気がないと困るのは子どもだよ。」と言っています。そして、「先生を元気にしてください。」と言っています。一番言っているのは保護者です。保護者には、一生懸命に話しています。「先生に元気がなくなったら、絶対に子どもにいいことはないでしょう。子どもが困ったら、お父さん、お母さんはもっと困るよね、

先生に元気がないと困るのは子ども

- 保護者や地域、関係者へ積極的な発信を
- 先生に感謝や労いの言葉をかけよう
- やりたいこと思い切ってできる環境にしよう

だから先生には感謝の言葉とか、ねぎらいの言葉をたくさんかけて、元気にしてください。」と言っています。このキャンペーンを継続していて「そのかわり文句があったら校長のところでいいから、先生方をできるだけ元気にしてください。」とお願いしています。

「先生に元気がないと困るのは子ども」キャンペーンと合わせて、先生方を元気にするには、やりたいことを思い切ってやれる環境を校長が創ってあげなくてはいけないと考えています。今の先生たちを見ていて、本校もそうですけど、何を萎縮しているのかなと思います。それは、保護者からの苦情であったり、地域の批判だったり、そこをまずは校長が守ってあげることです。そういう空間を創ってあげることが大切だと思います。そして、まずやりたいことは、全部校長が認めてあげて、応援してあげられる環境が大事だと思っています。何度も言いますが「先生に元気がないと困るのは子どもたち」です。

次は、最近の私の元気の薬を紹介します。これは、2年生からもらった手紙です。毎朝、校門に立っていますが、2年生の女の子が寄ってきて「校長先生！」と言って、お手紙を渡してくれました。校長室でもらった手紙を開いたら、次のようなことが書かれていました。

「2年生がくれた手紙」

◇ 大字校長先生へ

いつも本当にありがとうございます。

私は、勉強が苦手なのですが、漢字テストで100点をとれるようになってきました。

私は、校長先生が、朝、大きな声であいさつをしてくれるのがとてもうれしいです。

私は、校長先生が大好きです！！！！

私はこれで退職までは、頑張れると正直に思いました。感謝というか、この思いが先生たちには一番大事なのかと思います。私は、校長としてこの手紙のおかげで、毎日元気です。校長室に、この手紙を貼っていつも見ています。先生たちにもこのようなことを伝えたいし、与えたいのです。そうすれば、先生たちも、もっと元気になるのではないかと、そのように思っています。

これは6年生が、日光に2泊3日で行ってきたときの学年集合写真です。110人ぐらいの学年です。

先日、全国学力・学習状況調査が発表になりました。「学校に行くのが楽しいですか」の項目が、令和3年度の全国平均では、前回に比べて6ポイントも下がりました。6ポイントは、大きな下がり方です。100万人いたら6万人が、学校に行くのが楽しくないと言い出したことになるのです。こういう行事を止めたことが、とても大きいと思います。子どもにとって本当に楽しかったことが、学校から消えたことは取り返しがつかないことではないかと思っています。今の子どものこの一瞬を大事にしたい、そう考えるようになりました。このことは、すごく反省をしていて、反省するのが遅かったと思っているぐらいです。これからは、どんどんチャレンジをして前を向いていきたいなと思っています。

可能性に満ちた子どもたちに囲まれて過ごす日々は、
何ものにもかえがたい私の財産です。
北海道地区の校長会のみなさんが、
素晴らしい出会いを通して、
数多くの足跡を残されることを祈りながら、
私の話を終了いたします。

本当に今日は旭川に呼んでいただいて、先生方の前で、私の思いを話すことができて、とてもありがたかったと感じております。是非これからも子どもたちの成長のために力を尽くしていきたいと思いますのでお力を貸してください。先生方も是非健康第一で、素晴らしい学校経営をなさってください。本当に、今日はありがとうございました。